

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作：ウッチャン大好きっ子

\* < > で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

新キャラ

- 1．学（まなぶ）力（りき）・美秀（みほ）・・・・高校3年生・中学1年生・小学2年生
- 2．道子（みちこ）

解説

- 1．使徒の証・・・使徒（龍牙達5つの部門のリーダー）である証であり、  
各部門の使徒の証の色が部門の持つ色となる。  
それにより部下達は所属する部門の色の宝玉を身に付ける義務がある。  
色・・・透明→龍牙の部門である”生”の部門を指す。  
赤→龍牙の部門である”死”の部門を指す。  
緑→プロフェッサーの部門である”研究”の部門を指す。  
黄→蒼凱の部門である”情報”の部門を指す。  
青→天山の部門である”変身”の部門を指す。

～第27章～<最高コンビ・最悪コンビ>

4人は静かに八雲の骨董品店の入り口に近づくと、龍牙が手で全員を静止させ、  
「先に龍牙と青水が入るので後から二人は来てくれ。」と合図した。  
凱歌ときなこの二人は頷いた。その時、龍牙がチラッと二人を見て、済まなそうにしていた。  
その表情に二人を”さっきの事はもう気にしていない”という表情をした。  
龍牙はホッとしたかのような表情で店内に青水と共に入っていた。  
-骨董店店内-  
龍牙は静かに店内の奥に入っていた。そして、ついに八雲を見つけた。  
八雲は一生懸命に高そうな壺を磨いていた。龍牙はそっと八雲の背後に着いた。  
「やぁ、八雲。元気だったかい？俺様が荒らした後も親父の跡を継いでいる訳だ。」  
と八雲の耳元で囁いた。突然の事に動揺し、磨いていた壺を落としそうになった。  
恐る恐る振り返るとそこには、赤髪、赤眼の龍牙が立っていた。  
「禍悪主！なぜここに！？とかどうして生きている！？」と言い、逃げる様に奥へと走り出したが  
すぐに固まってしまった。  
八雲の前には青水が堂々と立っていた。  
「そんなに私って怖いかしら？それとも私に逢えて嬉しいの？」と優しい言葉ながらその声には恐ろしさを秘め、微笑みながら青水は言った。  
二人に前後を挟まれた八雲は霊を見たような恐怖に包まれた顔で横に逃げるしかなくなっていた。  
その時、龍牙と青水が素早く八雲の襟ぐりを掴み、引き寄せた。  
八雲は逃げられないと観念したのか、力なく捕まっていた。その光景を龍牙の後ろの方で見ている者に八雲は気が付いた。

それは居る訳の無い凱歌ときなこの二人だった。

「一体あんた達は何者なんだ？居る筈のない奴ばかりいるじゃないか。」という八雲は言った。

「ほ～。誰が居ないはずの奴だって？教えてくれるかな？」と龍牙は優しくも冷たい声で言い掴んでいた左手を離した。

八雲はぎくっとし答えた。

「それはまずアンタだよ！それにその女に、凱歌。全員と言っていい！」と怒鳴った。

龍牙は俯き笑い出し、八雲の襟ぐりを再び掴み、片手で30cmは軽く持ち上げた。

<おい。俺様がお化けだとも言うのか？この俺様がか！？笑止千万！少し甘やかされ過ぎたんじゃねえのか！豚ちゃん。>と龍牙は血の通わない様な冷酷で恐ろしい声で言った。しかし、きなこは龍牙が何を言ったのか分からなかったが雰囲気から凄い事を言った事が分かった。

八雲はこれが現実である事を痛感した。そして、ここから逃げないと殺されると感じたようだ。

急に八雲は暴れ、逃げようとした。しかし、地面に足が着いた時には青水に肩を掴まれ、あっさりと捕まってしまった。

「別に殺さないわよ。でも、抵抗するなら痛い目にあってもらうわ。前みたいに・・・。」

と微笑んで青水は言った。

龍牙と青水の二人は八雲の前に立ち、唐突に言った。

「1211に関する事を全て教えなさい。私達が知っている事はいいから。

例えば新しい基地の場所とかね。もちろん報酬もあるわよ。」と青水が優しく言った。

これに八雲は一瞬考えたがすぐに答えた。

「新しい基地？確かに新しい基地が出来たという事は聞いてはいるが、場所は知らない。

第一知っているとしても教えれば俺が殺されてしまう。もちろん、あんた等に教えなくても殺されちゃうかもしれないがな・・・。俺だって命が惜しい。」としっかりとした声で言った。

その答えに龍牙は不服そうに辺りを見渡し、一枚のお皿を手を取った。

それに気が付いた八雲はすかさず言った。

「やめてくれ！それは1、000万円は下らない皿なんだ！」と龍牙に懇願した。

「ああ。知ってるよ。だから手に取ったんだ。俺様の目は確かだからな。そんなに大切ならしっかりと答えろよ。」と龍牙は言いつつ、青水にその皿を投げた。

「そうね。このお皿、意外と重いかから落としちゃうかも。」と青水はワザとらしく落としそうな動作をした。八雲の悲鳴が店内に響いた。

この光景に凱歌ときなこは前に八雲に会った時の光景を思い出していた。

『あいつ、いつもこの脅され方されてるんだ。』ときなこは呆れてしまった。

そんな高級な皿による脅しを龍牙達がやっているのと龍牙が凱歌達を呼び、龍牙と変わって青水と凱歌・きなこで質問する事になった。

その間に龍牙は何かを探しているような様子で店内をうろうろしていた。

## ～第28章～<表の顔・裏の顔>

龍牙が店内を探しに行ってから数分して、店の奥から誰かが出てきた。それは中学3年生ぐらいの男の子だった。

「父さんに何している！すぐに離れろ！」と怒鳴った。これに凱歌ときなこは驚いた。

しかし、青水は気にせず質問を続けようとしていた。

「やあ、大きくなったな。確か最後に会ったのは5年ぐらい前だったかな学くん。元気かい？」と銀髪・黒目の龍牙が話し掛けた。

「あっ。龍牙さん。元気してますよ。そうですね、もう5年も前になります。今年で高校3年です。じゃあ、こちらの方達は龍牙さんの？」と学と呼ばれる少年が答えた。

「ああ。そうなんだ。また君のお父さんに聞きたい事があってね。又悪いんだけど、出掛けてもらっていいかな？」と龍牙が頼んだ。そう、彼は八雲の息子だった。

「えっと。いいですけど、行く所が・・・。」と学は店の奥に首を向けながら答えた。

「行く所は用意してある。明日は土曜日で学校休みだから、お母さんと兄弟達でここに行くといい。」と龍牙は内ポケットから封筒を取り出し渡した。

それは温泉への旅行について詳細に書かれた手紙だった。これには学や凱歌達も驚いた。

「随分と準備がいいのね。昔じゃあ考えられないわね。」と青水が言った。

「当然だ。時間が掛かると踏むだろう？それにいつの話してるんだ？俺だっと成長するぜ。」と龍牙が笑いながら言った。

「その旅館の宿泊費、交通費は俺達が出すから、心配せずに楽しんで来い。色々大変で疲れてるだろうからな。」と龍牙は学の肩を叩き言った。学は「そんなのダメですよ。」と初めは断るが、龍牙の「人からの贈り物は素直に貰わないと逆に失礼だ。」という言葉に押され、受け取る事になった。

彼は店の奥に入り、母親と弟、妹を連れてきた。全員で龍牙にお礼を言い、八雲に了承を得て準備を始めた。

- 30 分後 -

準備を終えた八雲の家族は八雲も後で来るという言葉を受け、出かけて行った。

「道子。後で追いかけるからな。」と八雲は優しく言った。「はい。先に行って待ってますから。」と妻・道子は答えた。

しばらく沈黙が流れてから、凱歌が八雲に訊いた。

「息子さん達は知ってるですか？1211の事。」と。それに対して少し間が空いて八雲が静かに答えた。

「道子も学達も知らない。だから、あんたは息子達を旅行に行かせたんだろう？」と。

「ん？確かに奥さんや息子達に愛する人が悪行を行なっていると教える必要もないだろう。まだ、学ならともかく、小中学生の美秀や力には早過ぎるからな。」と龍牙が笑顔で答えた。

ほのぼのした会話が終わり、1時間以上質問をするが埒が空かないと判断し施設に連行する事にした。

八雲を車に連れて行こうとした時、龍牙が慌てて八雲を素早く物陰に押し込め、

「皆、しゃがめ！」と怒鳴った。

全員突然の事に動揺したが龍牙の言葉を信じ、全員しゃがんだ。その瞬間、店のガラスが割れ、八雲が隠れる陳列棚に閃光が突き刺さった。

八雲はこの行動にただただ固まっていた。

～第29章～<組織からの使者>

『まさか今日、消しに来るとは・・・。しかし、家族を出掛けさせておいて良かった。』と一瞬ながら龍牙は安堵を浮かべた。

「凱歌、きなこさん大丈夫ですか？うわっと。」と龍牙が物陰に隠れながら呼び掛けた。

二人とも「こっちは大丈夫です。」と答えた。

「青水、二人と共に八雲を頼む。俺はスナイパーを。」と言い、素早くそして的確に外へと出て行った。  
「あっちょっと！全く。お二人さん、私が八雲の所に行って外に連れ出すから二人は外で車のエンジンを掛けておいて。」と言い、車の鍵を二人に投げ、八雲の所に向かった。

凱歌ときなこの二人は鍵を受け取り、息を合わせて外へ向かった。

凱歌は経験から狙撃を予想し、的確にきなこを誘導し車に付いた。きなこは素早く車のエンジンを掛けた。その間も八雲の店に閃光が刺さって行った。二人は心配そうにただ青水と八雲を待っているしかなかった。そんな時、狙撃が止んだ。二人はすぐに狙撃方向を見るが何も分からなかった。

青水はその機を逃さず、車に素早く乗った。

「二人とも大丈夫？八雲、貴方は？大丈夫の样ね・・・。禍悪主のお陰で何とかなったけど。追いますか！」と青水が言い、車を発車した。

その時、遠くからバイクが発車する音が聞こえた。青水は素早くその方向に車を向けたが、その横を赤いバイクが猛スピードで抜けていった。

「禍悪主！？どこからあんなバイク持ってきたの？まさか、あのバカ又鍵を無断で開けたんじゃ・・・。全く。行くわよ！」と青水はアクセルを踏み込んだ。その運転テクニックは素晴らしいものだったが、乗っている方としてはかなり応えるものだった。

しかし、その運転のお陰で猛スピードで逃げる犯人のバイクを捕らえる事が出来た。だが、そこに龍牙の赤いバイクは居なかった。

「あれ？龍牙さんがいない？どうして・・・。」ときなこが言った。その時、突然犯人の真横から赤いバイクが飛び出した。

「なんて乱暴な・・・。」と青水が呟く。凱歌は『それは貴方もです。』と思ってしまった。あまりの運転に体中をぶつけていた。

龍牙はバイクを犯人の真横に付け、犯人の後ろ首を掴み犯人のバイクを左キックで蹴り飛ばした。これにより犯人は龍牙の左手だけで支えられていた。しかし、龍牙が蹴り飛ばしたバイクは後ろに付いていた凱歌達の車に向かって飛んでいった。

青水は素早くハンドルを切り避けた。

「危ないじゃない！私じゃなかったら当たっていたわよ！」と青水はインカムを通して言い、車を止めた。龍牙もバイクを止めた。

「すまなかった。でも、君じゃなかったらあんな方法は使わなかったよ。信頼しているって事だよ。」と龍牙もインカムを使い話した。

そして龍牙は犯人を下ろし、手錠を掛け車に連れていた。車に乗る者達全員が犯人に興味を持ち外に出てきた。

しかし、八雲はおろか凱歌すら知らないスナイパーだった・・・。

「八雲が知らないとしても、凱歌も知らないか・・・。まあ、大した腕ではなかったからな～。さあ、車に乗れ。」と龍牙は犯人を車に乗せた。

「きなこさんは一応刑事として、凱歌もこいつの隣に乗ってくれ。八雲は助手席に。運転は青水いいか？俺はバイクを返してこないとマズイから先に行ってくれ。」と龍牙が指示すると、全員が頷いた。

二手に分かれて行動が始まった。

龍牙は車が発車を見送った後、バイクを戻しに行き、無理矢理開けた鍵を直した。

そして、犯人が乗っていたバイクを確認し、車を追い掛けた。

一方、車の方では、静かな時が流れていた。話す事もなければ、犯人を見る事もなかった。ただ、外を見て、ただ施設に着くのを待っていた。

そんな時、龍牙が早くも追いついて来た。

「どうだ調子は？」と龍牙がインカムで聞くと、青水が「複雑な状態よ・・・。」と答えた。龍牙は『やっぱり・・・。』と溜息を吐いた。

そのまま施設に着くまでその沈黙は続いた・・・。

- 施設前 -

施設の入り口の所を八雲を狙撃した犯人は待っていた刑事に連行された。

「これで良しと。さて、ようこそ我が家に・・・。」と龍牙は八雲に向かって不敵な笑みを浮かべ、施設内に導いた。

～第30章～< 誓いと脱退 >

- 取調室 -

入り口からエレベーターに乗り、地下2階の取調室に八雲を連れていった。

「すまないな。本当はもっといい所にしたいんだが、一応君は犯罪者だからな。」と言いつつ龍牙が八雲を座らせた。

八雲は恐る恐る促された椅子に座った。その反対側に龍牙が座り、後ろに凱歌ときなこが立っていた。青水は隣の監視室で記録を取っていた。

「そんなに恐がるなよ。別に俺達が裁くわけじゃないし、裁く気も毛頭ない。あるのは君の俺達への情報提供と信頼かな。」と龍牙は笑いながら言った。その言葉、眼差しに八雲は少し落ち付き、顔を上げた。

「さて、君が何を知り、何を知らないのか、それは分からないが。俺達が知りたいのは、第一に1211の新しい日本支部の位置だ。さあ、答えてもらおうか。」と龍牙は淡々と言った。

八雲は龍牙をしっかりと見た後、少し考えた後静かに話し始めた。

「確かに1211の日本支部が新しく完成したというのは聞いたが、さっきの狙撃で分かったと思うが、俺はもう組織から信用されていない。

だから、協力出来なくて悪いが本当に知らない。もちろん嘘は言っていないぞ。嘘なんか言ったらどんな目に合うか・・・。」と言い俯いた。

その姿を龍牙は静かにそして冷淡に見ていた。その最中、きなこが大声を張り上げた。

「本当に知らないの！貴方みたいな人が知らないわけないでしょ！」と言っている時に龍牙は左手をきなこの前にかざし静止した。

「コイツは本当の事を言っている様だ。コイツは俺の恐さをたっぷりと知っているし、その目に嘘偽りはなかった。八雲、本当に嘘はないな。俺はお前を信じる。」と龍牙は静かに言った。

その言葉に八雲ははっとし顔を上げた。そして、「本当にこんな俺を信じると言うのか？」言った。龍牙は静かに頷いた。

「本当に知らないんだ。でも、このままでは学や道子達が俺のせいで危険に晒されてしまう。こんな事を言うのは図々しいが、家族だけは助けてくれ。」と悲痛な声で言った。

その顔は1211の人間ではなく、一人の夫であり、父の顔していた。

その顔に凱歌ときなこはただ驚いてしまった。

「さっきも言ったがいつ、お前を裁くと言った？ 家族を助けないと言った？ 昔の俺と今の俺を一緒にしないでくれ・・・。

悪いが今の俺はそこまで冷酷ではないし、学君やお前の家族と付き合いがあるし、大切にしたいんだ。その幸せを。

前にも言ったが”報酬がある”と。それは君と君の家族の身の安全と生活環境の保証だ。それは君の我々への忠誠と1211からの脱退が前提だがな。それを君は約束してくれるか？ いや、必ずするだろう、大切なものの為に。」と微笑みながら龍牙は言った。

その言葉は凱歌の心を突いた。『この人に付いて行きたい』と強く思った。

「分かりました。というよりももちろんです。それで家族が助けられるのなら。でも俺はどうなるんだ？ やはり捕まるのか？」と八雲は言う。

「そうね。罪にすると結構あるわね。上の判断にもよるけど、国際的な組織に所属していたからね～。」と青水が取調室に入りながら言った。

「それはない。私達もそんな細かい事まで面倒見切れないぞ。」とその場に居る全員がその声に驚いた。「また、暇潰しに監視カメラで定点観測してたんですか？ 南原様は人が悪いですよ。全く。」と龍牙が言いつつ八雲の左後側の天井を見た。

そこには、良く見なければ分からないほどの小さな監視カメラが付いていた。

「別に見ようと思っていた訳じゃないぞ・・・。でも、お陰で事が早く進むだろう。我々だって武器の密輸程度の事件で動かないし、家族は知らないと報告を受けている。特に学君か。彼は良い子らしいしな。俺は罪の抹消については了承する。後は龍牙に一任する。じゃあ、俺はこれで。」と連絡を切った。

「また一方的だな～。まあ、これで抹消処理も出来るし、後は家族を迎えに行くだけ。でも、1211について成果なしか～～。」と言い、龍牙は背伸びをし、両手で頭を抱えてしまった。その後で凱歌達3人もガックリと肩を落とした。

「なぜ、凱歌のパートナーに聞き出さない？ パートナーが居るはずだろう。」と八雲が安心した拍子に言った。

「あああああ～～！！！」と青水と龍牙が大声を上げ、同時に顔を見合わせてから凱歌の顔を見た。

その行動に凱歌ときなこは驚き、後ずさりしてしまった。しかし、その驚きの声を上げ終え冷静になった龍牙の顔は手掛かりを見つけたと喜ぶ青水とは正反対のとても暗い表情だった。

きなこにはその暗い表情に異様な不安を掻き立てた。

### ～第31章～<龍牙の恐れ>

「しかし、奴と凱歌を合わせるのは・・・。奴は今まで更正させてきた者達とは違い、根からの犯罪者と言っても言い奴だ。

そんな奴が協力するとは思えない！ ましてや何を仕出かすか分からない！

俺は奴をここに連れてくるのは反対だ。危険過ぎる！」と龍牙ははっきりとした声で言った。

「でも、唯一の手掛かりなんだから・・・。大丈夫よ。貴方が担当してるんだから貴方が指示しないと呼ぶ事が出来ないのよ。」と青水が言う。

「そんなに危険な奴なんですか？ そのホイさんのパートナーって？」ときなこが聞いた。

「凱歌は覚えていない様だが、劉冥と言うのが凱歌の監視、指示役の名前だ。

奴は君と同じスナイパーをしている。腕は良いとは言えないが……。しかし、その性格、思想ははっきり言って凱歌とは正反対であり、冷酷で殺しを何とも思っていない。そして、決定的に違うのが、1211への絶対的な忠誠だ。正に暗殺者向きの訳だ。

だから、交渉も罪の抹消も一切意味をなさない。そして、通常の刑罰を科しても狙撃も殺しも片手に収まる程度しか立証できない。そのため、長くても20年行けばいい方だ。つまり、再び組織に戻るのが落ちだ……。だから説得を続けているものの全く効果なしの状態だ。

あそこまでの忠誠心は、はっきり言って異常としか言い様がない……。」と龍牙は静かに劉冥について説明した。

凱歌は深く考え、”劉冥”について思い出そうとしたが、龍牙の言った通り何も思い出す事が出来なかった。

暫し沈黙がその場を包んだ。

「でも、ホイさんのチップも外されたし、龍牙さんもプロフェッサーも沢山の検査をして何もなかったんだから、大丈夫ですよ。それにホイさんも強くなったもん。それに龍牙さんも皆さんも付いているから。

残された唯一のチャンスをもものにしないと、1211の殲滅が更に遠くなってしまう！」ときなこはしっかりとした声で言った。その言葉に居た全員がこの言葉に胸を突いた。

「確かに我々は、凱歌を隈なく調べ何もなかった。しかし、それは物質的な点でだ。だから精神的に何か仕掛けられていたらその場で何とかするしかない。その危険性を考慮して欲しい。それで良ければ……。劉冥を呼ぶ手続きをしよう。」と龍牙は覇気のない声で答えた。

全員が静かに頷いた。その表情は真剣そのものだった。

龍牙はそれを確認し、静かに胸元からインカムを取り出し何かをいじった。

そして、インカムを耳に掛け話しやすい様に合わせ、話し出した。

「ああ、俺だ。今、調査中の劉冥という奴を司令部に連行してくれ。取り調べをしたいんだ。1時間後だな。分かった、待ってる。頼んだ。」と龍牙は部下に指示した。

「これでいいんだ？ 1時間後、司令室つまりミーティングルームに奴が連行されてくる。さて、気合を入れていきますか！」と龍牙は言い、全員を見渡す。

青水に八雲を別室に案内させた。

～第32章～<1211の忠実なる犬>

- 1時間後 -

沈痛な面持ちの四天王が入り口で劉冥を待っていた。

黒塗りの車が一台静かに四人の前に止まった。そこから、サングラスにスーツという格好の男が助手席から手に何か用紙のような物を持って降りてきた。

男は四人の前に立ち、お辞儀した。その後、龍牙の前に立ち直し、再度先ほどよりも深いお辞儀をした。その男の胸には赤い宝玉が輝いていた。

龍牙に男が手にしていた用紙を手渡した。龍牙は手慣れた調子ですらすらとサインをし、用紙を男に返した。

男は用紙を確認し、車の中にいる仲間に合図した。

後席から助手席から出てきた男と同じ格好の者が黒っぽい服を着た男を挟んで出てきた。その挟まれた男の目は異様にぎらぎらしていた。この男こそ、凱歌のパートナー・劉冥だった。

「後は我々がするから戻っていいぞ。そいつには色々と問題が多いからな。」と龍冴が言い、蒼凱と天山が劉冥を挟み連れていった。

暫くその場で部下と話してしてから、ミーティングルームへと向かった。髪を掻きながら足取り重く進んでいた。

#### - ミーティングルーム -

劉冥が連行される30分ほど前に準備が完了し、凱歌ときなこには入り口で待たずにここで待つ様に龍冴が指示していた。

蒼凱と天山が劉冥を連行してきた時、凱歌ときなこは劉冥を座られる椅子の前に立っていた。

先に入ってきた蒼凱が二人を確認し、静かに劉冥を室内に入れた。

二人は入ってきた男の目を見た瞬間に背筋に悪寒が走るのを感じた。そのあまりにも異様な輝きと冷たい目に・・・。

そんな時、龍冴が部屋に入ってきた。その顔は恐いほどに暗かった。

「遅くなってすまん。＜やぁ、久しいな劉冥。確か最後に会ったのは凱歌の手術後すぐだったかな？あれから今まで心境に変化無しか？＞」と龍冴は劉冥を睨みながら言った。

「これこれ、白銀の龍冴様じゃないですか。心境の変化などある訳が無い。必要もない。

しかも嬉しい事に王 凱歌と合わせてくれるとはな。しかし、再び余計なものを手にした様だな。」と流暢な日本語で龍冥は話した。

＜別に日本語でなくていいぞ。ここに居る人間はほとんど中国語を話せるからな。分からなくても翻訳機もあるからな。正確な言葉を知りたいのでな。＞と龍冴が劉冥の前に周り言った。

「心配は要らない。日本語ならしっかりと勉強した。そこらに居る馬鹿な日本人より知っている。」と冷淡に劉冥は答えた。

その時、きなこにプロフェッサーがそっと背後から話し掛けた。

「きなこさん、これを耳に付けておきなさい。それは翻訳機じゃ。この調子では、必要ないかもしれんが必要になってからでは困るからな。」とそっとプロフェッサーは言った。

きなこは「ありがとう。」と言い、左耳に付けた。その翻訳機はイヤホンの様に付ける。とても小さい物だった。

少し沈黙が広がった。その間も龍冴と劉冥は睨み合っていた。

「では、聞いても無駄だとは思いますが単刀直入に言わせてもらおう。

1211の新しい日本支部の場所を教えてもらおう。知らないとは言わないよな？」

と龍冴は挑戦的な調子で言った。

「それを聞いてどうする？ついに貴様達”法の犬ども”が我々を潰しに掛かるか？どっちにしても俺がそれを話すとも思っているのか！

俺は凱歌の様に悪魔に成り損ねるような真似は死んでもしない！」と強く鋭い口調で劉冥は答えた。その口調は悪魔そのものだった。

その言葉に凱歌は強く動揺した。龍冴の話を聞いてはいたとはいえ、ここまでのものとは思っても居なかったからだ。

「やはり聞くだけ無駄だったか……。なぜそこまで1211に忠誠を誓う？何か恩義でもあるのか？」

と龍冴はあまりの不思議さに聞いてしまった。

「なぜ？簡単な事だ。貴様が言う通り恩義があるからだ。

俺と妹は幼くして両親に先立たれた。その時、俺の妹は重い病に懸かっていた。それは死に直結する病であり、手術など大金が必要だった。その時に俺達を助けてくれたのがボスだった。俺達の為に金を惜しまず使い、俺に仕事までくれた。だから、一生俺はボスに付いて行くと決めた。人間として当然の事だろう？凱歌。」と劉冥はその時ばかりは人間ぼさを見せたが、最後の凱歌を呼ぶ声には憎しみが籠もっていた。

凱歌はその劉冥の呼び掛けにその真意を指したが無視をした。それは・・・”ボスへの恩を仇で返すような真似をするな”と言うものだった。

しかし、凱歌の内ではその真意に僅かながら納得をしている自分がいる事に気が付いた。「ふん。それが恩返しだとも言うのか？そのボスの事は良くは知らんが組織を造る者として言わせてもらえば、それは単に組織に尽くす者を探す、作るためだ。その時に都合良く親も居ず、恩を売る要因が十分にある適合者が居た。それが俺だっただけの事だ。」と龍牙は冷たく言い放った。

その瞬間、劉冥の目の輝きが変わった。知的ささえ感じさせていた冷たい目が、ボスの事に触れた途端、その目に黒い炎が宿った。

劉冥の変化に気が付いた者のこの時誰もいなかった。

### ～第33章～<呪い再び>

「では、ボスは俺を利用したということか？妹も俺を組織に尽くさせるために利用されたと言うのか！」と今までにない怒りそして殺気の籠もった声で劉冥は言った。

「はっきりとは言えないが可能性が非常に高い。考えてみる。凱歌にあのような非道な装置を付けまで利用しようとしていた。そのような事をするボスが、言い方は悪いが対した才能も無い人間に本気で、利用する気がなく人助けをすると思うのか？

生憎だがこの世界はそこまでいい人ばかりではないのが現状だ。ましてやきょっ・・・！

いや、今まで面倒を見てきた凱歌でさえ、必要であればあのような事をするのだぞ。」

と龍牙ははっきりとした声で言った。

その時、劉冥が笑い出した。その場に居た者はその突然の事に驚いた。

「それは、凱歌！貴様は才能に愛された人間であり、俺はボスが必要とする才能を持ち得なかった。だが、凱歌にあの装置を付けたのは当然の報いだ！そして再び貴様は世界最強、最悪スナイパーとして必要のない物を消し去り、ボスの元に戻るのだ！！」と劉冥は言い放ち、どこに言葉が分からない呪文のような言葉を発した。

劉冥の言葉に全員がすぐに凱歌の居る方向を見た時、龍牙が劉冥とは反対側の壁に叩きつけられる凄まじい音が響いた。

全員が凱歌の居た所を見た時には凱歌は龍牙の居た位置に足を振り切った状態で立っていた。

「ホイさん！どうして！？」ときなこが悲痛な叫びに近い声で言った。

「どうして・・・。それは簡単な事だ。凱歌は再び1211の忠実なる殺人マシンと戻った。ただそれだけの事。」とその血の通わない冷酷な声で劉冥が答えた。

その言葉を聞き、龍牙を除く全員が凱歌を見つめた。そして、その瞳から色と輝きが消え、その身から優しさが消え去っている事を感じた。

そう。凱歌は再び1211の呪いに囚われ、暗殺の道具と化してしまったのである。

ミーティングルームには劉冥の高笑いだけがこだましていた。その異様な冷たさを秘めた声が・・・。

しばらくその場に居た全員が固まり、劉冥の笑い声が止み、静まり返った時だった。  
何かが動く音がした。

凱歌を除く全員が音のする方向に向くと、先ほど凱歌に蹴り飛ばされた龍牙が立っていた。  
ズボンの汚れを払いながら。

「いや～、驚いたよ。君がその言霊術を知っているとは。まあどうせ～、あの装置を付けた人間から教わったのだろう。しかし、今の不意打ちは意外と効いたよ、凱歌。君もやれば出来るじゃないか。そのスピード、破壊力があれば俺の練習相手になれるよ。」と龍牙は微笑みつつ凱歌に向かって歩みを進みながら言った。

龍牙と凱歌の距離が3メートルほどになった所で龍牙は歩みを止め、凱歌を凝視していた。

ミーティングルームには張り詰めた空気が漂っていた。その細い糸が切れるのを待っているかのようには沈黙が流れた。

先陣を切ったのは龍牙だった。

「劉冥。悪い事は言わない。凱歌に掛けた言霊術を解け！俺が本気になったら凱歌では相手どころか足止めにもならず殺しかねない。それは君もだ。俺は誰にも死んで欲しくない！

だから大人しく術を解け！」と龍牙は苦しそうに言った。

「ふん。それが人に頼み事をする言い方か！第一、アンタは凱歌を傷つけられない！そんなに術を解きたいのなら自分で解けばいい！」と劉冥は答えた。

「解けるものなら今すぐに解いている。君はこの術の事を良く知らないようだな。つまり掛けたのは君ではない。この術は基本的な決まりこそあるが、術に使用する言葉の羅列は自由なのだ。呪術師の好きに作られ、一人一人違うと言っていい。もちろん先に言った決まりという奴には準じているが、それでさえ組み合わせだけで何千万通り以上あるのだ。それを探すだけで、2、3年懸かってしまう。それに術に卓越している者なら、通常とは異なる組み合わせを使っている可能性がある。

第一、君が先ほど凱歌に俺を攻撃されたのでさえ、あの短い文であれだけの事をさせた点から見てもこの術を掛けた者は相当術に卓越しており、覚えやすく、探られづらい様に考えられた羅列だ。

しかもそれは術の掛けられた凱歌に合わせた組まれていた。恐らくその羅列は”この中で一番強い者を動けなくする”様に指示するものだろう。理由は羅列の中に俺の名前が無かった事、あの羅列を聞いた後本当に一瞬だったが俺と天山の比べ、俺を攻撃した様に感じた。

これであの羅列は合っていると思うが違うかな？

つまりこの羅列は凱歌の能力を計算に入れ、それを十分に発揮できる様になっている。

呪術師は大まかな指示をするだけでいい様にだ。」と龍牙は冷静な分析を言った。

「そこまで分かるとは・・・。アンタもこの術を使えるということか。確かにこれは凱歌の能力、経験を最大限に発揮できる様にしておっしやっていたよ。ならなおさら凱歌を止める事は、アンタには出来ないな。」と劉冥は不敵な笑みを浮かべながら答えた。

その時、劉冥は再びあの言葉の羅列を口にした。それに乗じて凱歌が劉冥を縛る手錠を壊し、龍牙に向かっていった。

素早く凱歌の攻撃をかわすつつ、劉冥を睨んだ。

戦いは一方的だった。凱歌が高速の手刀や蹴りを連続で繰り出してきた。それを龍牙は防ぐ事無く避けていった。

やはり劉冥が言った通り龍牙は凱歌に手を上げられなかった。

凱歌の攻撃を数センチ、体を反らし体力を最小限の消費で済む避け方をしていた。

しかし、凱歌の方も徐々に龍牙の避け方を理解し、攻撃を変えていった。

龍牙は徐々に大きく飛び退けるなど体力を大きく消費していた。龍牙は攻撃を避けながら傷つけずに凱歌を元に戻す方法を考えていた。しかし、凱歌を縛るこの”言霊術”と呼ばれるは、今なおもその名を口にするだけで恐れられる解除が不可能の恐ろしい術である。

そんな時、凱歌の強烈な下段回し蹴りが龍牙の足を捕らえた。龍牙は油断した事を悔いたがそんな隙を与えずに凱歌の拳が龍牙に向けられた。素早く飛び起き、凱歌の拳から逃れたが、強烈な蹴りは龍牙の予想を越え、多大なダメージを龍牙の両足に与えていた。

苦痛で顔歪めるが凱歌の攻撃を止む事はなく襲ってきた。今までの様に細かい回避行動が出来ない龍牙は両手を使い、攻撃を払うほかなくなった。しかし、それでは龍牙にダメージが蓄積する一方であり、反射的に凱歌を傷つけてしまう可能性があった。そのため、攻撃を払う事を最小限にし、大きく退くなどの行動範囲を広くする事で時間を稼ぐ事にした。

しかし、いくら時間を稼いだとしても龍牙には”言霊術”を解く方法が浮かばなかった。

劉冥は龍牙のその甘い考えに怒りが込み上げてきた。そして、龍牙は”言霊術”を掛けた呪術師が言っていた事を思い出した。

『もし相手が一方的に回避ばかりしたり、埒が空かなくなったらこの羅列を言うが良い。』という一言を。

劉冥はその羅列の意味を知らせてはいなかったが、今必要と考え、その羅列を口にした。

その瞬間、龍牙は凱歌の変化に驚いた。

それはそれまでは生气と言うものがほとんど感じられなかった凱歌の体から、強い気が発せられたのである。龍牙はこの状態が何を指すのかを良く知っていた。そして、それを凱歌が行なえる事に恐れを感じた。その気ははっきり言って異常と言っていいほどに強大だった。

龍牙は気を感じた瞬間に『離れなければ！』と本能的に感じたが、それより早く凱歌の右手が龍牙の懐に入った。龍牙も慌てて気を練り防ごうとしたが気を練る時間の無さとあまりにも強大な凱歌の気から、無防備な状態でその強大な気が籠もった正拳突きをまともに食らってしまった。

その強大な破壊力に龍牙は10メートル以上先に壁に叩き付けられた。そしてそのまま、力なく崩れて落ちた。その龍牙の叩き付けられた壁はあまりの衝撃から崩れ落ちてしまった。

そして、強大な気功を繰り出した凱歌の周囲には風のペールが出来ていた。まるで凱歌が風を纏っている様だった・・・。

その凱歌の光景に、きなこを始めその場に居た者全てが圧倒された。絶対的な力を感じざる負えなかった。

圧倒され固まっていた時だった劉冥が大声で高笑いをした。

「やはり凱歌！お前は本当に武術の神と才にもっとも愛された者だ！さあ、次は誰が凱歌の相手をするかね？」と劉冥は言った。

「やはり血は争えないのか・・・。ここはわしが行くしかないか。」とプロフェッサーが小声で言った。しかしそれを振り切り、天山と蒼凱がプロフェッサーの前に立った。その手には二人の愛器が合った。

「プロフェッサー。悪いのですが僕達がお先に行かせてもらいます。最近動いていないものですから体が鈍っちゃって。」と蒼凱が言い、蒼凱の愛器”麗華の槍”を構えた。

そして天山も静かに腰に下げた愛器”リベルテ”と”ジュスティス”を鞘から抜き構えた。

二人の眼差しは凱歌を助けようというのではなく、敵として見ていた。

「私達は龍冴の様に貴方を完全には信じていなかった。そして、龍冴の様に私達は優しくも甘くもない！私達には更正処置中の者に対して”危険因子に対する対抗権”というものがある。これ以上私達に攻撃及び抵抗をする場合は、”即時処刑執行権”を発動し、劉冥並びに王 凱歌の両名を処分します。これは忠告ではなく警告です。」と天山はしっかりと声で宣言をした。

「いかん！”即時処刑執行権”を発動してならん！そうなれば更正不可の烙印を押され、ここで死ななくても凱歌は死刑と同等の処置を取られてしまう！もう更正処置を受けられなくなる。二人とも分かっているはずだ！凱歌は操れているのだぞ。劉冥さえ捕まえ、解除用語を聞き出せば元に戻る！

お前ら二人とも凱歌の人間性を知っているはずじゃ！」とプロフェッサーが怒鳴り声で言った。

「と言うことは……。お願い！天山さんも蒼凱さんもやめて！ホイさんを助けて！ホイさんがどんなに良い人を知ってるでしょ！」ときなこは二人に呼びかけたが、返事は無かった。

「ふん。今度は二人掛かりか。お前達はアイツと違って凱歌を傷つける事をためらわない様だな。だが、お前達のリーダーを倒した凱歌に勝てるのか？」と劉冥は口元を緩めながら言った。

「私達のリーダー？確かに龍冴は事実上のリーダーと言ってもいいでしょう。ですが、武術においては四天王と呼ばれるだけあって凱歌ごときに負けるほど弱くはありませんし、龍冴は凱歌を傷つけまいと手を抜いていた。その結果があれです。ですが、私達は必要とあれば死ぬまで行かずとも二度と自由に動く事が出来ない体にするまでです。」と冷たい口調で天山が言った。

それを聞いてきなこが二人の前に立ちはだかった。その顔は何も出来ない悔しさと歪んでいた。

「お願いします……。ホイさんを助けてください。ホイさんが死ぬような事になったら私……。どうしてもダメなら私がホイさんを止める！」ときなこは二人に言い放った。

拍手が鳴り劉冥が口を開いた。

「美しい愛情には敬服するよ。じゃあ、その愛する者に殺されるがいい！今回は日本語で指示をしてやろう！」と劉冥は言い、再びあの羅列を言い日本語で言い始めた。

「さあ、我に従う凱歌よ。お前のもっとも愛する者に”死”という最高のプレゼントを渡してやるがいい！そして、この場に居る全ての者に死を与えてやれ！その身に死神を宿すがいい！！」と劉冥が宣言をすると凱歌が背を向けるきなこに走り出した。

天山と蒼凱の二人は素早くきなこと凱歌の間合いに入った。

そして凱歌の拳が二人に向けられようとした時、紅い閃光が凱歌の後に回った。

二人がそれに気がついた瞬間、凱歌が後から頭を抑えられ、片手で高々と宙に持ち上げられた。

凱歌がその強力な握力から逃れようと抑えるに手を掛けるが全く歯が立たなかった。

「誰が甘いだと……。俺様もなめられたものだ！さあ、俺様をときめかせてもらおうか！！」と抑える者の冷酷な笑みを浮かべ言い放った。そして凱歌を抑える左腕を振り、凱歌を壁に叩き付けた。

その力は先ほどの凱歌の気功以上の破壊力を持っていた。

凱歌は自分がぶつかり、崩れた瓦礫に埋もれたしまった。

凱歌が浮いていた場所には、血よりも濃く炎よりの鮮やかな長い紅髪・紅眼の男が不敵な笑みを浮かべながら立っていた。

その者から出るおぞましい冷たい感じに全員が自分が凍り付いていくような感覚に襲われた。

まるで目覚めてはならない魔王が目覚めてしまったかのような重圧感と共に……。

- 続く